

高度科学技術社会を生きるグローバル人材の育成

— SGH への取り組みを通して見えてきたもの —

How to Nurture Global Human Resources to Live in a Technological Society

SULE 委員会

金指 紀彦	塚越健一朗	日渡 正行	栗山 絵理	永尾 瑠衣	安井 崇	加納 隆徳	大谷 晋
花園 隼人	吉岡 雄一	市原光太郎	宮城 政昭	岩藤 英司	内山 正登	小境久美子	田中 義洋
齋藤 洋輔	斎藤 祐一	山本 浩二	神田 春菜	石崎 智子	熊木 孝太	光田怜太郎	阿部 睦子
森棟 隆一	岩橋 亜弓	若宮 知佐					

<キーワード> 学びの方向性 SGH 課題探究型授業 模擬裁判 カリキュラムの構造化

1. はじめに

本校は今年度、文部科学省より SGH（スーパーグローバルハイスクール）アソシエイトに指定された。SGH は、今年度3年目を迎える本校 SSH の活動と「車の両輪」であるとの認識のもと、校内では両事業ともに SULE 委員会が運営を担っている。本稿では、アソシエイトに指定されるまでの校内の議論がどのようなであったかを振り返り、今年度アソシエイトとして行ってきた活動を整理・記録していく。そのうえで、カリキュラム構造化の必要性など、SGH の活動を通して見えてきた学校全体の課題や今後の方針についてまとめてみたい。

2. SGH に応募するまで

2-1. 校内での議論 ～第1回拡大 SULE 委員会～

当初、SGH への応募については校内に慎重論が強かった。本校は行事が多くクラブ活動も盛んである。授業時間外に、そのような課外活動が入るのみならず、レポートを始めとする授業の課題、実験・実習のまとめ、グループ発表学習の準備など、生徒はきわめて忙しい生活を送っている。そのような中に SSH 事業が3年前から入り、ますます生徒も教員も時間に余裕がなくなっている、そこへ SGH も入ってくると破綻を来すのではないか——との懸念が教員の間にはあった。だが、職員会議で「文科省が掲げる SGH のねらいは本校の教育理念と大きく重なっている」等の説明が SULE 委員会からあり、「SSH 事業は理系生徒にメリットが大きくなるので、文系生徒にも同様のチャンスを与えられるとよい」という趣旨の発言もあり、二度の職員会議を経て、平成 26 年 1 月、SGH に応募することへの合意が形成された。

どのようなかたちで本校の SGH 事業を構築していくかを考えるために、全教員に参加を呼びかけて、臨時の

拡大 SULE 委員会を 2 回開いた。1 月 16 日(木)に、校長、副校長はじめ二十数名が参加して行われた第 1 回の委員会では、議題はおのずから二つの論点に収斂していった。一つは「本校らしい SGH のあり方」であり、もう一つは「現状の学校システムをどう整理するか」であった。前述したように、本校の現状は生徒も教員も時間的余裕がないという認識があり、「SGH への応募」には「現行システムの整理」がセットで要請されるという、本校の課題が最初からあらわになる議論の流れであった。

前者の論点、すなわち本校らしい SGH のあり方については、「東南アジア、特にタイ王国との交流に基軸をおいて、日本および世界の経済・環境の持続的発展を考えていく」という課題研究でいこうという方針が割合にすんなりと決まった。本校は 40 年前よりタイ王国からの国費留学生を受け入れており、タイとの絆が強い。このような本校の歴史を踏まえ、東西を軸に捉えがちな「グローバル」化に、南北の方向性を加えたいという強い思いもあった。アジアに軸足を置いてバランスよく世界を眺められることこそが、これからのグローバル・リーダーに求められる資質であると位置づけ、日本語能力をベースとして、タイ語などの地域言語とグローバル言語としての英語の双方を身につけるチャンスを与えようという方向性を得た。タイ王国大使館をはじめとして、人的つながりのある JICA やタイの大学に協力を要請できるのが本校の強みであるし、SGH をきっかけとしてそういった校外の機関と連携を強めるのは有意義であるという発言もあった。

後者の論点、学校システムの整理については議論百出の様相であった。まず、「生徒は本当に忙しいのか？」との問題提起に対し、課題を適当にこなす癖がついている／総合の論文にしっかりとした内容のものが減った／グループ学習なのに協働せず分担当でやっている／発表

する授業が多い割にプレゼンテーションスキルは下がった／SSHの個人研究との兼ね合いで部活動をあきらめる生徒がいる／多方面に手を出しすぎて体調（精神面も含めて）を崩す生徒が増えた、等の現状分析があった。

課題探究型・課題解決型授業が多いのは従来から本校の特色であり、これはまさにSSHやSGHが求める21世紀型資質・能力を育てる教育のあり方そのものである。本校はこれまであらゆる教科で協働型・探究型授業を行い、大きな成果をあげてきた。ただ、これらはうまく生徒に投げかけていかないと、生徒は自らの資質・能力を伸ばそうとするよりは、従来の能力のなかで要領よくこなそうとする方向に動く。また、課題の探究に終わりはないので、精一杯やろうとするとオーバーワークに陥りがちである。このような本校の現状はもしかしたら、全国の高等学校で課題探究型授業を推進していこうとしている日本の現状において、参考に供すべき事例なのかもしれない。

ともあれ、「課題を発見・解決しようとする態度を持ち、他者に対してしっかりと自分のことばで話すことができる」ことを一つの共通目標として私たちは教育を行っており、それこそがまさにグローバル・リーダーの根本的な資質・能力なのではないかという共通認識を得たことはこのミーティングの最大の収穫であった。一方で、生徒や保護者からの負託を考えると、大学受験に耐える学力を保証し続けることは本校において是非とも必要だとの意見もあった。SSH／SGHでの成果目標と、そもそも私たちが目指してきた「学びの方向性」を擦り合わせることで、そしてそれを生徒や保護者に説明していくことは、本校が早急に取り組むべき課題だと言えるだろう。

さて委員会では、このような現状を解決する具体策として、大きく分けて三つの方法が提案された。「総合的な学習の時間」の扱い方の改善、土曜日活用など時間割の変更、学校全体のカリキュラムの構造化、の三つである。

まず「総合的な学習の時間」については、本校ではその運営が学年担任団に任されている現状がある。これは、生徒集団の研究志向の傾向を生かしやすく、学習旅行や進路ガイダンスと連動して「総合」のコマを運用していけるというメリットがある。しかし、毎年一定の水準で、学校としてねらう「総合的な学習の時間」の目標が達成されているとは言いがたい。この「総合」の扱い方を学校全体で検討し、生徒の課題探究をサポートしていく時間として充実させていくべきであるという意見が多くの教員から出た。

次に、時間割の変更としては主に土曜日活用が提案さ

れた。現在の時間割で7限が飛び出している火曜・金曜を6時限として、生徒の部活動や個人研究の時間を増やすために、土曜日に授業を置こうというものである。だがこの点に関しては、私たち教職員の勤務体制の問題や、生徒保護者への周知期間の問題など、クリアすべき課題が多いことも確認された。

最後に、学校全体のカリキュラム構造化については、隔週月曜日放課後に教員ミーティングを開くなどの具体的なシステムを作って、ぜひとも取り組んでいこうということになった。これまでのように教科内で年間指導計画を検討するにとどまらず、教科を超えて教育内容を整理し、学校全体として有機的なカリキュラムを組み上げていくことの必要性が認識された。

この委員会の最後では原田校長より、①大学も再編の渦中にあるが、そこで文科省から求められているのは、「どういう職種につく人材を養成しているのか／どういう場でどういうことができる人を養成しているのか」を明確に意識した教育をせよということだ。本校の教育でもそこを具体的に言えるとよいのかもしれない。②本校は、平行してさまざまな教育プログラムが走っていたいへん意欲的なのだが、システムが複雑化している面もあるので、このSGHをシステム整理のチャンスにできるとよい。③先ほどから問題となっていた生徒の課題研究の問題だが、単に時間の問題ではないと思う。研究へのアプローチの仕方を「総合的な学習の時間」の中などで、規準化してしっかり指導できると良いのでは？ といった三つの提議があった。

2-2. 応募内容の検討 ～第2回拡大SULE委員会～

1月30日（木）に第2回目の拡大SULE委員会を開いた。ここでは主に、どのような内容で申請書類を書いていくかについての具体的な検討を行った。最初に運営指導委員に入っていたきたい方をリストアップし、手分けして交渉に入ることにした。また、すでに国際的に活躍している卒業生にリサーチして、「グローバル・リーダーとしてのキーコンピテンシー」を本校なりに考えたという案も出された。

そして前回の会議を受けて、「グローバル・リーダー育成に際して、何を解決すべき課題とするのか？ なぜ、東南アジアなのか？ なぜ、バランスよく世界を眺められることが重要なのか？」についてディスカッションした。以下、ここでの発言の記録である。

○世界の経済や環境に、これからはアジアが大きな影響を及ぼすようになるだろう。また、発展途上で人口が

- 多い国の方が経済的な可能性がある。
- 環境面において、熱帯雨林を擁する東南アジアの存在は大きい。熱帯雨林の荒廃が急ピッチで進んでいることは我々と大きな関係がある。
 - 日本には資源がない。アジア、アフリカとの連携が日本の「持続」にとって不可欠である。
 - 先日講演をしに来てくれた卒業生は、何でもかんでもやっていた結果として今、内的な必然性を持ってアフリカに関心を抱いている。放っておいてもどんどん自分でやっていく生徒が減ってしまった。何でもかんでもやるような人間を育てるにはどうしたらいいのか。
 - 互いの文化を尊重するような人格がベースとなる。西洋文化に詳しくてもアジア、アフリカの演劇を見たことがある人は少ない。とても面白いものがあるのに……文化的背景を持たせることが重要だ。
 - 50期の学習旅行でタイに行ったが、希望を聞くとみんなヨーロッパに行きたかった。本校の生徒でもやはりタイのことは知らない。そこを開いていきたい。
 - タイを知って何が得られるのか？ 地理の授業と何が違うのか？ SGHの理念に照らせば、おそらくタイのことを知るのには道具に過ぎなくて、そこからどんなグローバル・リーダーとしての資質を育てるのかを問題とすべきだろう。
 - 政治的主張ができるタフネスさ、困難な課題に立ち向かうタフネスさを育てたい。
 - 「SULE」が基本である。知的総合力をもった生徒、すなわち価値観の多様な社会を生きていくうえでバランスよく多面的に物事を見られる生徒を育てたい。
 - 現実的な文脈から切り離された抽象的課題にしてしまうことには反対である。タイとの交流が世界をバランスよく眺めるためのケーススタディになればいい。リアルな文脈を背負っている人間として考えた方がいい。
 - 「タイを学ぶ」のではなく「タイと学ぶ」スタンスで行きたい。オリエンタリズムなどの哲学的な素養も付けさせる必要があるだろう。
 - 人口減少は日本、中国、韓国だけ。東南アジアを拠点とすることで、ESD（持続可能な社会）のヒントが得られるかもしれない。
 - 人口問題については、社会全体を総括するための切り口としては使えるかもしれない。どういう課題をたてるかについては慎重な議論が必要。
 - 自分が生きている世界がどういうものであるかについてもっと意識的である必要がある。世界や社会の構造

を知るべきだ。

- 課題を強いて作るならば、100年200年先まで持続可能な社会をつくるにはどうしたら良いか。
- ESDは国際中等教育学校がすでにやっている。よりリアルにESDを捉えることで独自性をだしてはどうか。持続可能性を追求していくなかで衝突が生まれたときにどうするのか？ とか。
- 本校はこれまでも、国家間の関係が悪化しているときにでも、中国や韓国に日中小大使や学習旅行で生徒を送ってきた。もちろん安全の確保を確認できたからという前提が大きいですが、衝突があるからこそ交流すべきだとの強い思いがあった。
- そもそもグローバル・リーダーの資質、キーコンピテンシーとは何か？ それを育成するための教育課程の構築は可能だろうか？
- 北半球だけでない、南半球を含めた世界や社会の構造をバランスよく眺められる人材。
- 考え方、分析の仕方、すなわち世界を眺める視点を育てること。
- 文科省の応募要領によれば、SGHに求められているものが4項目あるが、本校は1の「教育課程の研究開発」よりは2の「先進的課題研究……発展的な実践」が該当するだろう。

参考〈SGH 応募要領より〉

【取組内容】

- 1 グローバル・リーダー育成に資する課題研究を中心とした教育課程の研究開発
又は
- 2 先進的な課題研究等の実績を踏まえた、グローバル・リーダー育成に資する発展的な実践（課題研究の一環として行うフィールドワークや成果発表等のための海外研修等、単なる提案に終わらない積極的な行動など）
上記に加え、
- 3 グローバルな社会・ビジネスに関する課題として、文理融合型の課題研究も推奨
- 4 学校全体の授業改善に資する教育課程及び教材の研究開発の実施も推奨

2-3. 文部科学省でのヒアリング

上記 2-1、2-2 の経緯を経て、2月上旬に SGH 応募書類を提出することができた（添付資料(1)(2)(3)参照）。文部科学省による審査の結果ヒアリングの対象となり、3月17日（月）に原田校長と田中 SULE 委員長とでヒアリングに臨んだ。以下は田中教諭によるヒアリングの記録である。

SGH 文部科学省によるヒアリング

3月17日（月）於：文部科学省 5F6 会議室
事務局 4 人、外部審査員による面接

1. 当方から7分間の説明
（概要4分：原田校長／具体的取り組み3分：田中）
 2. 質疑で出た主な質問項目
 - ・ 課題研究の内容に、生徒の活動と教員の活動とが混在している。課題研究1～7の主体は生徒ですか、教員ですか？
 - ・ 「合意形成」がメインでよいのか？
 - ・ 外部機関との連携は東京学芸大学だけか、これでは、挨拶の言葉を覚えておしまいになってしまうのではないか。
 - ・ SSHとの棲み分けは、どう考えているか？
 - ・ 教育課程の特例は必要としていないが、それでよいのか。
 - ・ 目標として示されている1～4がいずれもキーコンピテンシーである。どれが重要か？ 課題が捉えきれいていないのでは？
 - ・ キーコンピテンシーを見つけるのではなく、どれが重要かを考えて、カリキュラムに反映させた方が生徒のためになるのではないか。
- 特に、「教育課程の特例は必要としていないが、それでよいですね」については、さらに、「それでは、研究する意味がないのではないか」とまで言われたので、「もし、教育課程の特例が必要なのであれば、条件を示して新しい学校を作って研究すればよいのだと思います。一般的な学校のシステムの中でSGHに取り組むからこそ、意味があるし、それを他の学校に波及させることができると考えています。自分自身の学校さえ良ければよいのではなく、すべての国内の学校のために、SGHに取り組もうとしているのです。」とお答えしておきました。

3. SGH アソシエイトとして

3-1. 大学プロジェクト研究への申請

SGH アソシエイトとして活動するにあたり、ぜひとも東京学芸大学とこれまで以上に連携したいと考えた。また SGH アソシエイトは文部科学省からの予算は付かないため、資金面の援助を大学から受けたいという実状もあり、大学の「特別開発研究プロジェクト（現代的教育課題研究）」に応募した。申請内容は以下の通りである。

【研究課題】：複雑化した国際社会を生きることになる高校生に、グローバル・リーダーたるキーコンピテンシーを獲得させる教育カリキュラムの開発を行う。専門性に裏付けられたコミュニケーション能力を持ち、アジアに軸足を置いたバランスのよい世界観を持っていることがグローバル・リーダーの最も大切な資質と位置づけ、教科の枠組みをこえた課題研究、プレゼンテーション・合意形成能力育成カリキュラムを構築する。

【研究計画】【1年目／研究期間の別：2年間】

①合意形成能力育成カリキュラムの開発

国連の「ミレニアム開発目標」などを参考にしながら、現代の国際的な課題は何であるかを生徒自らに考えさせ、それに対していかに合意形成を図っていくかを実践的に学ぶ授業を開発・実施する。芸術スポーツ科学系渡辺雅之教授や国際交流センター見世千賀子准教授の指導助言を受けつつ、地歴公民、理科、英語、国語ほかの教員で教科横断的に授業を開発する。授業の一環として模擬国連や国立大学附属高校間での課題解決型討論会などにも参加する。

②アジア言語講座の開発

1、2年生の希望者を対象としてアジア言語講座（韓国語とタイ語）を開設する。本学人文社会科学系アジア言語文化研究分野李修京准教授や大東文化大学国際関係学部遠藤元准教授の支援を受けて、これらの言語を学ぶ学生・大学院生・留学生にTAとして来校してもらう。条件を整えば本校生を大学へ「学内留学」もさせたい。また、本校で学んだタイ国留学生にも支援を要請する。

③海外の高校との交流

タイ王国や韓国など、アジアの高校生と共同で課題探究型学習を行う。スカイプを使って、それぞれの国が抱える課題とそれへの取り組みについて情報交換し、11月の学習旅行でのフィールドワークにつなげる。また、現在本校はSSH事業の一環として

タイのチュラボン高校に理系生徒十数名を派遣しているが、これとは別に文系で優れた研究課題を持つ生徒を、在日タイ大使館の支援を受けて、3月に訪タイさせたいと考えている。

④キャリアガイダンスの実施

本学に学ぶ留学生や、国際的に活躍している本校卒業生、およびタイ王国で活躍している本校タイ人卒業生などによるキャリアガイダンスを実施することで、グローバルな社会・ビジネスに関する課題を肌で感じる機会を得る。

⑤カリキュラムの開発とキーコンピテンシーの研究

高校三年間の発達段階に応じたプレゼンテーション能力開発やレポート・論文作成カリキュラムを作成し、多教科で目的を共有して実施、学習評価を行う。本校のめざすグローバルリーダー育成に必要なキー・コンピテンシーとは何かについて、国立教育政策研究所等の協力を得ながら研究を深める。教員の取り組みとしては現在既に、毎週月曜日の放課後に多教科でのミーティングを実施している。

⑥プロジェクト全体の評価と還元

以上①～⑥の実践を通して、(1)グローバルリーダーとしてのキーコンピテンシーとは何か、(2)それを獲得させるカリキュラムや学習評価はどのようなものか、(3)生徒はどのように変容したか、について年度末に研究紀要にまとめるとともに本校ウェブサイトでも発信して、全国の中等教育におけるグローバル人材育成に寄与する。

このプロジェクト研究が大学で採択されたことは、今年度本校のSGHの取り組みにとって大きかった。国際交流センター見世千賀子准教授やアジア言語文化研究分野李修京准教授との連携が（年度後半になってしまったもの）現在始まっている。見世先生には主に地歴公民科の教員と連携を取っていただき、生徒の市民性教育についての助言を受ける予定である。また、李先生には東京学芸大学に在籍中の韓国人留学生を紹介していただき、本校のインカフェにおいて「韓国語入門」「韓国文化紹介」といったミニ講座を開講することになっている。

この他、かねて生徒から要望の強かった文系内容の講演が実現したり（後述5-1）、京都大学主催の「高大におけるカリキュラム改革を考える一探究力育成の視点から」などの研修に参加して、教員の資質を高める機会を得ることができた。

3-2. 名古屋大学グローバル

コミュニケーションプログラムへの参加

名古屋大学教育学部附属高等学校が中心となり、海陽中等教育学校、神戸大学附属中等教育学校、本学附属国際中等教育学校、それに本校のアソシエイト校5校と名古屋大学との連携で、グローバルコミュニケーションプログラム（以下GCPと表記）という高大連携の企画が今夏よりスタートした。この企画の概要と目的は以下のとおりである。

- 1) 全国から集まった高校生が混成チーム（1チーム5名程度）を作り、現代の国際的な課題についてグループディスカッションし、その成果や提言を発表する。
- 2) 名古屋大学・大学院に在籍する各国の外国人留学生がチームリーダーとなり、グループディスカッションをリードするとともに、日本人高校生に多様な視点を示唆する。
- 3) 英語をオフィシャルとするが、思考や討論を深めるために補助的に日本語を使用してかまわない。英語力の育成よりも、積極的にグローバルな場に参画してみようという意欲を涵養することを目的とする。
- 4) 以上1)～3)を通して、高等学校と大学・大学院が連携してグローバルな人材を育成する。

主催は名古屋大学（担当：総長補佐 国際関係担当土井康裕准教授）および名古屋大学教育学部附属中・高等学校で、今年度は2014年の8月25日（月）に名古屋大学教育学部附属中・高等学校交流ホールを会場として行われた。

生徒たちは、「環境に関わる最も大きな課題とは？」というテーマで、午前午後それぞれ一時間半ずつグループグループディスカッションをした。その際、各グループに外国人留学生が二名ずつ付き、討論をファシリテートする役目を担ってくれた。その後、グループ毎にプレゼンテーションを行い、名古屋大学の先生がたから講評をいただいて終了というプログラムであった。すべて英語で行われた。

本校からは、1年女子一名、2年男子三名、2年女子一名の計5名が参加し、24日・25日の一泊二日の日程で参加した。「なるべく当日一日で作業が完結するように。事前に周到的な準備をすることよりも、限られた時間内で最高のパフォーマンスを出せることを評価したい」という主催者側の意図もあり、事前には各自で環境問題について調べておいた程度で、前泊した24日の夜にホテルで三時間程度の討論を行ったのが、唯一の全員での事前学習である。

当日のグループディスカッションは、all English ということで、英語が得意ではない生徒にとっては難しかっただろう。だが、英語力の高い生徒と普通の生徒とを混ぜてグルーピングしてあったため、生徒同士で助け合う場面がしばしば見られ、互いの学び合いが多かったように思う。また、ファシリテーターの留学生たちが、事前にディスカッションを何回も重ねて、その方法について熟知していたことも大きかった。

複数の視点を含みつつ最終的にグループで一つの意見を構築するという、今回のグループディスカッションのねらいは、本校のSGHが大きな要素としている「合意形成」に近い内容を持つと思われる。名古屋大学の土井先生のご了解を得て、今回使われたレジュメ「How to make a group discussion?」を以下に掲載する。

名古屋大学国際教育交流本部 高大連携プログラム
How to make a group discussion?

グループディスカッションとは？「グループディスカッション」といわれると、お互いの考えをぶつけ合い、正しい答えを探す作業と考えられることがあります。もちろん、正しい答えがある場合はそれでもいいのかもしれませんが、多くの社会問題において絶対に正しい答えなどありません。

では、「グループディスカッション」で求められることは何でしょうか？グループ内で異なる考えを持ち寄り、与えられたトピックの中で焦点を当てるべきテーマをグループとして決定し、その内容について議論し、結論を導き出すということです。個人としては異なる考えを持っていても、グループとして目的をもって明確な結論を導き出すことこそが最も重要です。つまり、グループワークのポイントは、グループとして一つの結論を導き出すための共同作業をするということです。

グループディスカッションを行うにあたり、以下のガイドラインと注意点について事前に理解して、効果的な議論を目指してください。

グループディスカッションの進め方

1. 役割を決める

グループディスカッションでは、それぞれに決められた役割を果たすことも重要です。

役割：リーダー、タイムキーパー、書記、発表者他

注意：リーダーは全員が話せるような機会を作る

役割であり、自分の考えを強調する役割であってはなりません。国会や裁判所でのリーダーたち（議長や裁判官）が自分の個人的な考えを議論の中心に差し込んではいけません。

2. グループワークの構造構築

グループワークを行う場合、グループとしての結論を導き出すことが重要です。その場合、時間内で何をするかをグループ内で共有しなければいけません。そのためには、下記のような項目を基本として、議論する内容の流れを考えなければいけません。

- ①トピックの可能性：与えられたトピックの中で、考えうるテーマや要素を全て挙げる。
⇒メンバー全員から意見を聞くことが重要！
- ②選定：どのテーマについて議論を進めるか検討し、具体的なイメージをグループで共有する。
- ③論点整理：選定したテーマについて Pro（長所）と Contra（短所）を挙げ、さらに各項目の優先順位などを検討する。
- ④問題の具体化：具体的な例を使って問題点を明確化する。特に、グループとしてテーマに関するわかりやすい具体像の共有を目指す。（全員で同じ映像をイメージする！）
- ⑤解決策：テーマについて考えうる解決策を検討し、その実現性と問題点を考える。特に、提案する解決策が現実的に実施されていない、または効果が大きくない場合、そこには何らかの問題があることをしっかりと把握する。
- ⑥結論：これまでの議論をまとめる。
- ⑦発表：プレゼンの流れや担当者、発表方法を決める。ロールプレイ等も有効な方法！

3. 時間配分

役割を決定し、議論すべき内容や方向性がまとまった後には、決められた時間内でどのように話を進めるかを決めなければいけません。特に、グループ内で議論すべき項目（上記2.の項目）の重要度を踏まえた時間配分を決定することが大きなカギになります。なぜなら、時間配分が決まれば、どれだけの時間で各項目について議論をすべきかが決まり、効率的な進行ができます。

4. 議論の進め方

最初に、決められたトピックに関してグループ全員の意見を聞くことからグループワークは始まります。そのため、まずは自分の考えをまとめ、わ

かりやすく説明できることが最低必要条件です。ただし、グループワークでは、自分の意見が採用されることが最大の目的ではありません。グループとして、全員が合意できる結論を見つけることが最も重要です。そのため、他人の意見を受け入れること、自分の意見と他人の意見の妥協点を見つけることが重要です。また、リーダーは自分の意見をできるだけ抑え、全員の意見をまとめることに注力すべきです。時々、自分の意見が結論になることを目指す学生がいますが、それは決して意義高いことではありません。それよりもグループの中で自分の役割を踏まえ、自分の意見をしっかりと持ったうえで、周りの意見を聞き、全体として調和することが重要な要素です。

5. 結論の導き方

結論は、グループワークで話し合った内容の結果をまとめることです。正しい答え、または完璧な答えが出なかったとしても、どのような議論ができたのか、どのような問題点を理解できたのか、そしてどのような具体的な提案ができたのかを明示してください。時々、結論の段階で突然新しいアイデアを出す人がいますが、それは蛇足です。上記を参考とし、実りある議論が展開できるよう、グループディスカッションを進めてください。

このプログラムに参加した本校生徒5名の感想（プログラムへの感想と自分がどう変わったか）を、以下に掲載する。

- ・今回の企画で、私は大きな刺激を受けた。自分とあまり変わらない年齢の人達がとても流暢に英語を喋り、留学生とコミュニケーションをとっていたからだ。私も何を言っているかはなんとか理解できたが、自分の意見を言葉におこそうとすると詰まってしまう事が多々あり、もっと勉強しなければならないと感じた。しかしながら、他国の人と会話が出来たこと、また英語を主としたグループディスカッションに参加したことで今までより英語を積極的に使ってみようと思えるようになった。更に、今回の企画で他の高校生の意見が聞け、自分の考え方の新たな視点となった。英語での交流の面でもグループディスカッションの面でも良い刺激を受けられたように思う。またこのような企画があったら参加したい。
- ・私は英語を学ぶことは好きで書くほうでも苦手ではないが話すこととなると途端に英語ができなくなってし

まい、それを克服するために今回の企画に参加した。しかし、やはり参加して英語で話さなければいけない環境に入ってもなかなか話すことができなかったので今回の企画に参加していた周りのメンバーのように普段から話すための英語を意識してもっと英語が出てくるようになった上でまたこのような企画に参加してみたいと思う。

- ・このプログラムでは、グループディスカッションを通して、自分と同年代の人たちが必ずしも自分と似たような考え方をしているとは限らないことがわかり、とても興味深いものがあった。ほとんどの会話を英語で行うことは、自分としてはあまり苦ではなかったのだが、英語があまり得意ではない人にもわかりやすく自分の考えを説明することがいかに難しいかを身にしみて感じさせられた。
- ・今回このプログラムに参加して、限られた時間の中でグループメンバーの意見をまとめ、発表するところまで持っていくことの難しさがわかった。グループメンバー5人の意見をまとめようとすると反対意見などもあるのでグループとしての考えをまとめるのは苦勞した。最終的にはありきたりの結論になってしまったが楽しくプレゼンができてよかった。とても良い経験になった。今回、環境問題について議論したことで気づいたことがある。
- ・環境問題の原因は、科学的な、例えば、二酸化炭素が温室効果を持つから、といったことよりも、発展途上国が発展するためにやむを得ず環境を破壊する、などという国際社会の現状の中に存在しているのだ、ということだ。私たちは先進国としての技術を活かし、他国の発展をも最少の環境負担で実現できるよう、技術提供を積極的に行っていくべきだという考えを得た。

(文責：若宮 知佐)

4. 模擬裁判

4-1 模擬裁判選手権に参加して

2014年8月に行われた模擬裁判選手権に本校として初めて参加した。模擬裁判選手権は8年前から行われている行事であるが、今回、本校チームは関東大会において準優勝をすることができた。今回の模擬裁判選手権について、今後のSGHの探究活動におけるモデルケースとなると考えられたので、報告する。

4-2 模擬裁判選手権とは

模擬裁判選手権とは、日本弁護士連合会が主催してい

るもので、高校生対象の模擬裁判である。コンテスト形式で行われ、採点の結果、優勝・準優勝などが決められる。生徒たちは弁護側役・検察側役になって、相手校と対戦形式で刑事裁判手続きを行う。生徒たちは論告や弁論などを行うことにより、話し方や議論の方法などで採点が行われている。採点は、現職の裁判官・弁護士・検察官・ジャーナリスト・大学教授などが行う。

今年度で8回目になる本大会は、最初は関東と関西の2会場で行われていたが、学校教育における法教育が浸透してきたこともあり、現在は全国4カ所で行われるようになった。今年度は関東大会・関西大会・中部北陸大会・四国大会が実施された。このコンテストの目的は大会パンフレットに以下の様に記載されている。

「この大会では、高校生が、1つの事件を素材に法律実務家の支援を受けながら、検察チーム・弁護チームを組織し、高校生自身の発想で争点を見つけ出し、整理し、模擬法廷で証人尋問・被告人質問を行うものです。刑事法廷で要求される最低限のルールに則り、参加各校の生徒が検察側と弁護側に分かれ知力を尽くして闘う経験を通じて、物事のとらえ方やそれを表現する方法を学び、刑事手続の意味や刑事裁判の原則を理解することをねらいとしています。」

このコンテストの特徴は、以前から教育現場でおこなわれていた模擬裁判（シナリオ型）と違い、弁護士会が作成したオリジナルの教材を用いる点である。模擬裁判（シナリオ型）は、基本的に話す内容が決まっていて、裁判の手続きを学ぶところに主眼が置かれている。そのため台本を読み進めることによって裁判の流れや手続きの意味を学ぶ事ができる一方で、実際の裁判には、台本があるわけでも無く、証拠の見方や法的な思考を育成することは難しい。今回のコンテストで用いられている教材は、台本的なものはほとんどない。台本がない代わりに生徒に示されるものが、実際に裁判でもちいるような証拠資料（書類）である。

この証拠資料は、有志の弁護士によってオリジナルでつくられていて、警察からの資料や供述調書などが作りこまれている。もちろん、実際の証拠ではないが、弁護士によると司法研修所などで用いている教材に近い形式であり、事件の内容は架空のものだが、リアルな設定がされているとのことである。

また、もう一つ大きな特徴は、弁護士や検察官などの人的支援が手厚いことである。今回、支援弁護士を引き受けていただいた方は週1～2回程度、来校して支援をいただいた。また、検察官の方からは実際の刑事手続き

について説明を行っていただき、検察側の生徒たちにも指導をいただいた。裁判所に関しては、場所の提供を行っていただき、実際のコンテスト会場は東京地裁の法廷を利用させていただいた。

本コンテストはこれらの特徴をもち、生徒たちの知的な好奇心とも合致する部分が多いと思われた。そこで、今回は2年生（60期生）を対象にして生徒を募集し、コンテストに参加することを決めた。以下が今回の模擬裁判選手権の事件説例である。

4-3 今回の事件説例（シナリオ）

オレオレ詐欺の犯人として逮捕された被告人。しかし、被告人は、「中学時代の旧友と遊びに出掛けたところ、彼から頼み込まれ、見知らぬ事務所を訪ねて集金することになった。友だちの手助けをしたはずが、突然刑事に呼び止められ、逮捕されて裁判にかけられる羽目になった」と主張。はたして被告人は、はめたのか、はめられたのか。

4-4 模擬裁判選手権の流れ

模擬裁判選手権の流れは以下の通りになる。

【大まかな流れ】

4月	生徒への告知 (学年集会で告知) 模擬裁判選手権申し込み
5月	日弁連説明会（於：日弁連ビル）
6月～7月	支援弁護士による勉強会など
8月	本番（於：東京地方裁判所）

模擬裁判選手権の関東大会への参加申し込みが多かったために、事務局による責任抽選が行われ、参加校は以下の通りに決まった。

【参加校（関東大会）】

静岡県立浜松北高等学校（静岡）
湘南白百合学園高等学校（神奈川）
東京学芸大学附属高等学校（東京）
東京都立小石川中等教育学校（東京）
法政大学中学高等学校（東京）
山梨学院大学附属高等学校（山梨）
早稲田大学本庄高等学院（埼玉）
早稲田大学高等学院（東京）

関東大会は8校が参加、関西大会は6校、中部・北陸大会は4校、四国大会は4校の参加であった。法政中学

高等学校と本校以外は、昨年度も出場している高校ばかりであり、湘南白百合学園高等学校はここまで7連覇を果たしている強豪校である。当初、初出場校である本校がどこまでたたかうことが出来るのかは未知数であった。

今回、参加生徒は14名（すべて2年生）であった。この生徒たちは担当教員の授業担当クラス以外からも多くの生徒が参加してくれた。5月に日弁連で打ち合わせがあり、担当教員が説明会に参加。その時に支援弁護士を紹介され、本校の支援弁護士として3名の方をお願いできることになった。支援弁護士からは、以前の大会の動画を視聴しておくことや、資料の読み込みなどを指示された。

法廷に立てる人数が限定されているため、全員が法廷に立つことを優先し、弁護士側と検察側に分かれて法廷に立つことを決めた。しかし、最初から弁護側と検察側に分かれて勉強会をするのは効率的でないという支援弁護士からのアドバイスもあり、別々にはせずに全員で勉強会を開始した。生徒たちは週一回程度、自主的に学習会をひらいて資料の読み込みなどを行った。ただ、時間の制約などもあり、勉強会は自主的な参加形式をとった。勉強会のスケジュール（主なもの）は以下の通りである。

【勉強会のスケジュール】

- 6月17日 支援弁護士との顔合わせ
- 7月9日 資料について各チームで
議論、論告・弁論の作成着手
- 7月18日 支援検察官来校
刑事手続きについての解説
- 7月23日 論告・弁論の完成、尋問事項の作成着手
- 7月26日 自主勉強会
- 7月30日 尋問事項の完成、リハーサルその①
- 8月1日 リハーサルその②

生徒たちは支援弁護士との顔合わせから大会まで1ヶ月ちょっとで、大会に臨んだことになる。今回の事案（4-3参照のこと）については、「母さん助けて詐欺事件」であったため、事実の整理も容易ではなく、法的な論点を簡単に見出すことができるようなものではなかった。また、参加している生徒たちも、所属しているクラブの活動や、他のSSH事業にかかわる準備があったりして、メンバー全員が集まることは困難であった。そのため、この状況については苦労も多かったそうである。上記の生徒勉強会以外にはも自主的に生徒同士が集まり、DVDを見たり、本を読んだりといったことを積み重ねた。

4-5 模擬裁判選手権

模擬裁判選手権は8月2日に霞ヶ関にある東京地方裁判所法廷で行われた。生徒たちは9時頃に集合、10時から開会式、そして午前と午後に試合を行った。午前は早稲田大学高等学院、午後は湘南白百合学園と対戦することが決まり、本校は午前が検察側を務め、午後は弁護側を務めることとなった。

実際の裁判と同じように、相手にわかりやすい説明が必要であると生徒は考えたので、事前につくってきたフリップボードや掲示するものなどを用意して説明を行った。



図 実際の法廷を用いた模擬裁判



図 ホワイトボードを使った説明

実際の法廷を使う事で、参加生徒にも緊張感があり、良い経験になった。また、参加生徒が全員法廷に立つことができ、各自で役割を分担したことが、とてもよかった。実際の大会の様子は、生徒たちの準備が功を奏し、分かりやすいプレゼンができた。また、相手校の主張に対しても、的確な反論を行う事ができ、後に審査員講評では高い評価をいただくことができた。結果、準優勝を

させていただくことができ、本人たちも大いに満足できたようである。

4-6 模擬裁判選手権のその後

ここに生徒の感想（一部）を掲載する。

今回私が模擬裁判選手権に参加して感じたのは、物事の多面性です。

本来事実の一つでありながら、状況、証拠などの物の見方によって様々に捉えることができることがわかりました。

準備の過程で読みこんだ資料は実際の裁判で使われるものと似た形で本格的に準備されており、たくさんの情報が少ない資料のなかに詰め込まれていました。情報を取捨選択し、証拠となる事実をつないでいき、説得力のある物語を作っていくためには、皆と話し合い様々な方向から穴がないか確かめていく必要がありました。意見が割れることもありましたが、それらは話し合っているうちに「違う視点から見ているから意見が違うんだ」「別視点ではこう考えられるのか」という新鮮な驚きが変わり、その驚きを楽しみながら準備を進めることができました。

また6月から当日まで何度も弁護士の先生方が学校を訪ねてくださり、この物事の多面性や弁護士・検察官のお仕事など、様々なことを教えていただきました。弁護士の先生方からは検察・弁護側それぞれのストーリーを組み立てていく中で多くのアドバイスもいただき、実際に法廷で通用するような質問や論告・弁論を考えることができたのはとても貴重な体験でした。

そして模擬裁判選手権当日、弁護側・検察側に別れて他校と意見をぶつけあうと、やはりまた新しい視点を提示され、あれ程話し合ったのにまだこのような視点があったのかと驚き、同時に相手のレベルの高さに嬉しさを感じました。また論理の展開によっては多少無理のあることでも事実のように聞こえることに恐怖を覚え、論理の展開、プレゼンテーション能力の大切さを強く感じました。

このように生徒たちは、法に関わって多面的に物事を見ることの重要性をつかんでくれた。また、今回の件を通じて法に興味をもってくれた者も多くいた。担当教員の一感想としては、生徒たちが自主的に運営して参加し

たことが良かったと思われる。夏休み前の段階ではほとんど形にもなっていなかった状況から、夏休み入ってから本人たちの努力により相当ブラッシュアップがうまくいくことができた。来年度以降もぜひ、継続した取り組みを行いたいと考えている。

4-7 今後に向けて

今回、文科系で探究活動的な学習として、模擬裁判選手権に参加した。結果として、生徒たちも十分に努力し、良い結果を残すことができた。しかし、今後の課題も見えてきた。課題は大きく分けて3点ある。一つ目の課題は、文科系探究活動への認知不足である。実は今回の模擬裁判選手権参加については、会議などでも報告していたが、位置づけが曖昧だったために、活動場所・活動時間・メンバーなどが全職員に周知出来ていなかった。そのため、先生方から何の活動をしているのかと問い合わせをされることが多かったため、職員への周知が必要であると感じた。二つ目の課題は場所の確保である。理科系の活動と比べて、文科系の活動は集まる場所だけ確保すれば良いために、どこへ集まるのかを固定することが出来なかった。そのため、SSHの活動と比較して、活動場所を転々とせざるを得なかった。このことについても、探究活動をするための場所をしっかりと確保することが必要であると考え。三つ目の課題は、指導教員の確保である。今回、指導教員は1名で行ったが、どうしても指導教員が出張などでいない日も存在する。その場合の指導をどのように行うのかも今後の課題であると思われる。

今後、生徒の探究活動が益々増えてくることが予想される。一方で、活動を保障するためにも、指導教員や活動場所、活動時間の確保が喫緊の課題になると思われる。どのような形で生徒の活動を保障するのか、今後、SULE委員会を中心に検討していく必要がある。

(文責：加納 隆徳)

5. 特別授業、アジア言語講座など

5-1. 「物語とはどういうものか」

本校はSSH事業のひとつとして「特別授業」を年間15回ほど行っている。理系研究者を中心に、大学や研究所から講師を招き、高校生対象の授業や実習を行っていただくというものである。しかしこの特別授業は、SSH事業の一環なので、どうしても理学的内容にならざるを得ない。そのようななか、生徒から「真のサイエンス校を目指すなら文系的素養も重要であり、ぜひ文系

の講演会を開いて欲しい」というような要望、提言を受けることもあり、今年度は人文系・社会系の特別授業を織り込んでいくことにした。

11月19日（水）の放課後に、文芸評論家の井口時男先生をお招きし、インカフェにて2時間の特別授業（講演90分 質疑応答30分）を行った。題目は「物語とはどういうものか」で、井口先生からいただいた講演概要は次のようなものである。

物語が作り出す世界の基本構造はどのようなものでしょうか？ 英雄たちの冒険から「赤ずきん」などのメルヘンまで、ハリー・ポッターから村上春樹まで、実は同じ世界構造でできています。そして恐ろしいことに、政治も宗教も物語を利用します。実は私たちの世界認識の仕組みそのものが物語的なのです。17世紀初頭、物語批判を内蔵して書かれた『ドン・キホーテ』とともに近代小説が誕生し、19世紀、20世紀は小説の時代でした。けれども21世紀、再び物語の時代に逆戻りしているのかもしれませんが。物語は単純で素朴ですが、だからこそ永遠に不滅です。物語をもっと楽しむためにも、また政治や宗教にだまされないためにも、物語というものの仕組みをよく知っておきましょう。

当日は、思いのほか3年生が集まり、生徒たちが人文系の内容にいかに飢えていたかを思わされた。質問も3年生から多く出され、「人は二項対立の内部性を突破できるものだろうか」といった青年期に特有の哲学的課題を先生にぶつけていた。「物語」というテーマで、一見SGHには関係ないようにも思われる特別授業であったが、いみじくも受講生徒のひとりが感想に書いてきたように、「本当のグローバリズム、面としての世界理解のために」さまざまな価値観、学問領域に触れさせることは、グローバル人材育成の根幹であると再認識できた特別授業だった。

5-2. 韓国語とタイ語の講座開講

本校は2年時の学習旅行で韓国を訪問する（生徒の希望により三方面に分かれて行くので、訪問人数は年度によって異なる）。また、SSH事業でタイ王国のプリンセス・チュラポン・カレッジ高校と提携しており、冬にこちらの生徒が訪タイし、春にタイの生徒さんを日本に迎える交流事業を行っている。

このような国際的な交流活動に先立って、生徒たちに

韓国とタイの言語や文化を学ばせることが、課題となっている。これまでも「総合的な学習の時間」のなかで、「朝鮮語入門」等の講座を設けてはきたが、語学は継続的な取り組みが必要であり、単発の講義では達成が充分ではない現状がある。また、韓国やタイの文化についても、メディアを通して伝えられる通俗のかつプロトタイプな韓国文化、タイ文化の認識しかない場合が多い。

今回、本校SGHの理念として「アジアに軸足をのいたグローバルリーダー」を掲げたのは、このように、本校の生徒たちが余りにも東アジア、東南アジアの隣人たちのことを知らないという問題意識が大きい。まずこの現状を変えていくきっかけとして、希望者対象のアジア言語講座を開きたいと考えた。言語を知るところから文化に切り込んで行こうとするものである。インカフェスタッフの生徒を運営に巻き込んでいながら、週に1回程度継続的に朝鮮語とタイ語の講座を開く。李修京先生から東京学芸大学に留学中の韓国大学生を紹介していただき、火曜日/木曜日（放課となる時間が遅いためクラブ活動を充分行いづらい曜日）の放課後に1時間半程度の講座を定期的に関開く準備に、現在とりかかっている。またタイ語に関しては、本校の59期タイ国留学生をまずは講師として、同様の言語講座を開講する予定である。

6. カリキュラム構造化のチャンスと捉えて

6-1. 本校の現状

本校は、教員養成系大学の附属高校として、日頃から意欲的に授業開発が行われている。課題解決型授業、協働学習、発表授業などが多く、こういった本校の授業は他の参考に供すべき内容を含むだろう。だが、学校全体として目指す学びの方向性が不明確だという問題を抱えてもいる。自分たちが何を目標として教育しているのか、教科間で共有されていない。そのため、それらの授業が有機的に配置されているとはいえない。また、このことは本校が年に一回開いている公開教育研究大会でのテーマの曖昧さにもつながっている。授業形態としては、21世紀型の資質・能力を付けさせるものを試みているが、整理されていないため、生徒には過負担であるわりに資質・能力が充分伸びていないところがある。

この点について今年度、SULEカリキュラムの会という教員ミーティングを定期的に関き、あらゆる教科科目の教員で学校カリキュラムの構造化を試みた。これについては次項でさらに述べる。

もう一つの問題点として、「総合的な学習の時間」の運営方法を挙げたい。本校では学年が主体となって運営

しているため、担当した教員は毎年ほとんど一から作らねばならず非効率的である。また、もっと学校全体として「総合的な学習の時間」のねらいを明確にしていくべきだとの職員会議での発言もあった。校長先生から提案があったように「標準化した課題研究の方法」について全員に教えていくシステムも必要である。

現在、SULE 委員会では、本校が56期から持たせている「総合」のポートフォリオを改善パワーアップし、「SSH/SGH 探究ノート」のような冊子として一年生から配ることで、教科内で行われている課題探究型授業と「総合」などで行っている個人の探究活動とをリンクさせ、生徒への意識づけも行っていこうと考えている。

6-2. カリキュラムマッピングの研修会

上記のように、今年度1学期はSULEカリキュラムの会を隔週月曜日に開いた。各教科で行っている課題解決型授業、協働学習、発表授業の一覧や生徒作品を持ち寄り、まずは他教科がどのような授業をしているのかについて理解を深めた。そしてそれらを能力別に整理して行こうとしたのだが、ここで暗礁に乗り上げた。既存の学習指導要領で示されている評価の観点では、現在本校で目指しているキーコンピテンシーをうまく整理できないことがわかったからである。

そこで、SSH 事業の運営指導委員として継続的に助言を受けている国立教育政策研究所の深堀聰子先生からの、『『日常の授業』において、教科・科目間でルーブリックを共有することで、それぞれの教科・科目の共通性と固有性が見えてくるはずです。各教科・科目において共通ルーブリックをローカライズして活用することで、教科・科目間での対話の材料ができるのではないのでしょうか。そのことによって、各教科・科目が、共通のコンピテンシ育成に向けて、どのように協働し、何を貢献できるかという議論が深まると思われます』とのアドバイスを受け、米国大学協会の研究成果である VALUE ルーブリック（松下佳代「パフォーマンス評価による学習の質の評価 - 学習評価の構図の分析に基づいて」『京都大学高等教育研究』第18号、2012年）が学力の軸としている①探究と分析、②批判的思考、③創造的思考、④文章コミュニケーション、⑤口頭コミュニケーション、⑥読解、⑦量的リテラシー、⑧情報リテラシー、⑨チームワーク、⑩問題解決、⑪市民参加、⑫異文化知識・能力、⑬倫理的推論、⑭生涯学習の基礎とスキル、⑮統合的学習、を参考にしながらカリキュラムを整理していくことにした。

また、この作業の一環として、平成26年12月10日には名城大学人間学部人間学科社会・教育系教授 池田輝政先生をお招きして「カリキュラムマッピング」についての教員研修会を開いた。池田先生からは、研修会前に本校の教育内容について「ざっくりとした感想ですが、学びの内容・方法そして講師陣に魅力的なものを感じますが、生徒と関係者が目指す学びの方向性はみえにくい」との感想をいただいた。当日は、キー概念としての「ラーニング・アウトカム」（修了時に学習の中で獲得され統合的に働く概念的知識、方法的スキル、態度、価値観など）と、そのような学習者目線に立った教育プログラムの再構築の方法を学んだ。たいへん有意義な研修であった。

本校は従来から、いわゆるアクティブラーニングの手法を授業に取り入れている。その点で、このカリキュラムマッピングにより、生徒の学習を整理し、構造化することで、より効果的有機的にコンピテンシーを獲得させる学校教育システムが見えてくるように感じた。今後、SSHとSGHの活動を一つのきっかけとして学校カリキュラムを見直し、本校の目指すキーコンピテンシーを身につけさせる学習プログラムを、授業実践から評価の部分までパッケージ化してみたい。そこまで行ってはじめて、他校の参考に供しうる普遍化した教育システム (Scientific Universal Logic for Education) として、外部に発信して行けるだろう。 (文責：若宮 知佐)

資料(1)

【別紙様式 3】

--

ふりがな	とうきょうがくげいだいがくふぞくこうとうがっこう	指定期間	26~30
学校名	東京学芸大学附属高等学校		

平成26年度スーパーグローバルハイスクール実施希望調査

1 実施希望種 (該当するものに■)

- 幹事校
 幹事校以外

2 学校の現状

(1) グローバル人材育成に関する学校の教育理念

本校は創立以来 60 年を迎える。多様な生活経験を持った生徒が集まっている。創立時に定められた教育理念を一貫して掲げ、教育実践を重ね、多くの卒業生を輩出してきた。その教育理念とは以下のようなものである。

「民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとするわが国の理想を実現できる健康な身体と、高い知性と、ゆたかな情操とをもち、清純で気品の高い、大樹のように伸びる、世界性のゆたかな、日本国民を育成する。」

このうち「世界性のゆたかな」という理念については以下のように内容を確認し、また在校生、保護者、また対外的に示しつつしてきた。

「世界的な視野に立つてものごとを考え、自己を確立して世界の誰からも親しまれ尊敬されるような人間となるとともに、他の立場や文化を理解し尊重し、力を合わせて、世界の平和と人類の幸福に貢献する世界性のゆたかな人間を育成する。」

これらの理念のもと、各教科における教育実践研究がはかられてきた。

また、昭和 50 年以來、タイ王国留学生を 1 名～8 名受入れ（現 1 年生は東日本大震災の影響により中断）、タイ王国と日本の友好関係に多大なる貢献を果たした人物を卒業生として輩出してきた。タイ王国留学生の存在は本校の他生徒に対して内なる国際意識の醸成に大きな影響を与えてきた。さらに、翌昭和 51 年より、海外在学経験者を定員 15 名で募集し、受け入れを続けてきている。本校内には分掌として「帰国生・留学生委員会」が設置されており、留学生・帰国生の受け入れ及び大使館等との連絡協議とともに、本校からの海外留学生のサポートを続けてきている。この長年の経験が本校の理念における「世界性のゆたかさ」の実現を可能とする土壌を形成してきた。

そして、生徒に広い視野を持たせるため、1、2 年生では芸術以外の教科・科目を必修とし、幅広くすべての分野について学習させている。自分で判断して行動する態度を持たせるために、さまざまな場面で、生徒の自主性を重んじている。

(2) 探究型学習に関する教育課程等の特色

本校では実験・実習などの直接体験から課題探求能力を育成する学習機会を頻繁に設けている。

多くの教科でレポートによる学習を日常的に課しており、「本物から学ぶ」、「本物を学ぶ」ことを共通の呼びかけとして日々の学習を進めている。例えば、一日をかけて教科行事として実践される地理実習（地理 A；東京都内皇居外堀沿いを歩き、自己の課題を設定しレポートを提出）、野外実習（地学基礎；神奈川県城ヶ島の地層、地形計測をおこない、課題レポートを提出）、社会見学実習（現代社会；省庁、裁判所、NPO 法人、商社やソーシャルメディア企業、マスコミ、公共機関などから訪問先を選択、課題を設定しレポート提出）、科学見学実習（生物基礎；研究機関を中心に選択して訪問、課題を設定しレポート提出）その他、現代劇鑑賞、プラネタリウム見学などの実習においても同様のレポートが課される。

また、年間の学習成果として3学期に地理A、保健、社会と情報などの科目でも自ら課題を設定し、理科では日常的に実験・観察レポートを課している。教科における校外調査やレポートは日常の授業との密接な関係の中から計画され、机上の学習のみで完結しない学問の奥行きと実社会との結びつきを含めて学習することを目的としている。

総合的学習の時間を利用し、1年間のテーマを設定して探求する活動を行い、論文や作品の形でまとめさせている。さらに、研究成果の概要は、200wordsの英文要旨にまとめさせ、ネイティブ・チェックを受けた結果を、生徒にフィードバックしている。そして、クラスごとに研究の発表を行い、プレゼンテーションの経験を積ませている。各クラスの優秀な研究については、1、2年生全体の前で、プレゼンテーションを行い、研究成果の共有を行っている。

総合的学習の時間の一環で実施している修学旅行（本校では学習旅行と位置づけている）でのフィールドワークを利用した課題探求も行っている。

(3) グローバル人材育成に向けた教育課程上の取組（該当がある場合のみ）

キャリア教育の一環で、世界的な舞台に活躍する卒業生に来校してもらい、進路講演会を行っている。

3 学校の過去5年間の取組実績等（H21.4～記入日現在）

(1) 大学や企業、国際機関等と連携した主な取組

東京学芸大学と教員養成課程の学習方法・カリキュラムについての研究、高大接続に関する研究を行っている。

(2) 国際性を高める取組

さまざまな公募型の海外派遣事業について、生徒に紹介し、応募させている。また、帰国生やタイ王国留学生を、日本で教育を受けた生徒と混在させることで、お互いの経験を共有しつつ、切磋琢磨してきた。

また、AFS、YFU、UWCといった各種のプログラムで奨学金を得て、海外に1～2年間留学をする生徒がいる。出発前に申請し、帰国後海外での単位が認められれば進級できる。

本校では多くの講演会を実施しているが、講演を一つの教育機会と捉え、準備過程を含めた活動を行っている。一例であるが、平成25年10月9日にノーベル医学・生理学賞受賞者 Richard John Roberts 博士（英国）による講演会“Why I love bacteria”が開催された。当日は全生徒が参加し、講演、質疑は英語で行われた。1、2年生の生ホームルーム委員、生徒企画を担当する Intelligent café タッフ、3年生を含む有志生徒の企画・運営によって全て進行され、事前学習、キーワード集作成配布、司会、紹介、通訳、講演直後のサマリー作成・提示、お礼などをすべて生徒が実施したものであった。

(3) グローバル人材育成に資する課外活動の活動状況

日中小大使派遣を平成25年10月9日～16日に置くなった。

E S Sが英語の活用を通して、国際性を高める活動を行っており、部員数は約20名である。

また、プレゼンピックという情報社会に関する幅広い内容の中から、独自に研究テーマを設定し、プレゼンテーションの力を競う大会へ参加し、ワールド・スカラーズ・カップ (WSC) という参加チーム対抗で国際経済危機といったテーマでディベートなどを行い、教養を競う中高生を対象とした国際大会へ参加している。

(4) 研究歴

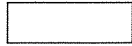
文部科学省スーパー・サイエンス・ハイスクール指定研究（平成24年度～28年度）

(5) その他特記すべき事項

本年度の本校の公開教育研究大会では研究主題を『新学習指導要領とその先にある教育』とし、グローバル化進展の過程で今後の学習指導要領の実践がいかにかはかれるべきかを研究、実践報告した。のべ22の公開授業、10の教科研究協議会、シンポジウム形式で21世紀型能力や学校と社会の接点などを指導要領上に反映させていくべきかなどを検討した。また、公開授業のうち6つの授業は、「知的総合力を持ったリーダー育成」「科学的理解に基づいて行動できる市民の育成」の研究の一環として、現代社会と地学による「リスク社会と防災～政府は市民の命を守るために合意形成をできるのか～」や、日本史と地学による「富士山宝永大爆発～噴火の実相と復興の歴史」など、教科・科目をこえた共同事業の実践を行った。

資料(2)

【別紙様式 5】



平成 26 年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	トウキョウガクゲイダイガクフゾクコウトウガッコウ				②所在都道府県	東京都
26～30	①学校名	東京学芸大学附属高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	全校生徒 1039 名を対象とし、募集型事業では、希望者を対象とする。	
普通科	352	355	332		1039		
⑥研究開発構想名	アジアとの共通理解・協力関係を構築するキー・コンピテンシーの探究と実践						
⑦研究開発の概要	バランスよく世界を眺められることがグローバル・リーダーの最も大切な資質と位置付け、教科の枠組みをこえた課題研究、プレゼンテーション、合意形成能力育成カリキュラムを構築する。他国の高校生・大学生と共同研究等を行う機会を通して、現代の課題を発見・理解し、その課題解決を意欲的に主導できる生徒を育成する。						
⑧研究開発の内容等	<p>(1) 目的・目標</p> <p>自らの学習や進路の延長上に、他国、他民族との協業、問題解決を意識した主体的活動を構築できる生徒を育成することが目的である。</p> <p>上記の目的を達成するために、以下の目標を設定した。</p> <p>① 自らの立場をとらえた上で、他者の視点を学ぶことを通して、相互不理解を外から眺め、論理的に物事を考えることができるようになる。</p> <p>② 母語が異なる人同士で、英語を介して自分自身の考えを主張できるようになる。さらに、英語で相手の立場を理解しながら、英語で自分自身の考えを主張できるようにする。</p> <p>③ 問題解決を意識して、主体的に活動できるようになる。</p> <p>④ 自ら課題を見つけることができるようになる。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>進路選択や学習成果の応用、課題設定などに地球規模の主体的課題としての意識が連動しない。多くの地域との協力関係や問題の合意形成のプロセスの学習から、自らの学びの延長上に主体的にグローバルな課題への取り組みを目指す意識が高まると考える。</p> <p>また、グローバルな社会・ビジネスに関する課題を解決していくためには、深い教養を身に付け、論理的にかつ、批判的にものごとを考え、行動していかなければならない。その際に、単に、日常会話が外国語でできるだけでは不十分で、いわば、内容の伴ったコミュニケーションになっていなければならない。真のグローバル・リーダーには、自国の伝統文化を尊重する態度も必要である。自国の伝統文化を尊重する態度なしに、他の地域や国々の理解はできないはずである。そのためには、いかに従来からの教育内容を効率よく学習できるかも鍵となる。その際、文科系、理科系といった狭い分類にとどまらず、文理融合型での学習が不可欠である。既存の教育内容の再構築を行い、限られた時間内で新たな取り組みと合わせて、いかに実践していくかを目指したい。</p> <p>(3) 成果の普及</p> <p>常に、本学や外部機関による評価を受け、ホームページを通じた活動報告を日常的に行っていく。公開研究大会等で授業実践を公開、研究協議会を開催することで、本校でのSGH事業の成果の普及を図る。本校紀要へ研究成果を掲載するとともに、成果報告書を作成する。</p>						
	⑧-1 全体						

<p>⑧ -2 課 題 研 究</p>	<p>(1) 課題研究内容 21世紀型能力の育成カリキュラムの構築と学校教科への導入・評価を行う。 まず、日本語でグループワーク、ディスカッション、論文作成、プレゼンテーションなどの学習を行い、それらを有機的に結び付け、さらに高い水準に上げるとともに、最終的に英語で発信できるようにしていく。その課題研究の内容としては、以下の通りである。</p> <p>① 国際的な環境問題に対して、いかに合意形成を図っていくかを考える講座を開発・実施する。具体的な課題を設定し、年間を通じて英語で講義をし、評価する。</p> <p>② タイ王国、韓国などとの海外交流を通じた生徒間の共同研究の実施と、ネットを利用した交流と準備、教科をこえたプレゼンテーション能力育成カリキュラムの開発・実施、教科をこえたレポート・論文作成能力育成カリキュラムの開発・実施を行う。</p> <p>③ 3年間の段階に応じたプレゼンテーション能力開発やレポート・論文作成カリキュラムを作成し、多教科で目的を共有して実施、評価を行う。</p> <p>④ 本校のめざすグローバルリーダー育成に必要なキー・コンピテンシーとは何かについて、国立教育政策研究所等の協力を得ながら、研究を深める。教員の取り組みとしては、隔週で月曜日の放課後に、教員がキー・コンピテンシーを考える会を開催する。</p> <p>⑤ タイ王国、韓国を中心に、模擬国連を行う。</p> <p>⑥ 第二外国語講座（タイ語、韓国語）の設置</p> <p>⑦ 国際的に活躍している卒業生やタイ王国で活躍しているタイ人の卒業生によるキャリアガイダンスを実施することで、グローバルな社会・ビジネスに関する課題を肌で感じる機会を得る。</p> <p>⑧ 短期留学の推進</p> <p>(2) 実施方法・検証評価 タイ王国、韓国などとの海外交流を通じた生徒間の共同研究の実施とネットを利用した交流と準備、教科をこえたプレゼンテーション能力育成カリキュラムの開発・実施、教科をこえたレポート・論文作成能力育成カリキュラムの開発・実施。3年間の段階に応じたプレゼンテーション能力開発やレポート・論文作成カリキュラムを作成し、多教科で目的を共有して実施、評価を行う。 東京学芸大学等の語学講座の協力を得て、第二外国語講座（タイ語、韓国語）を実施し、その学習の成果は、研修、学習旅行で確認する。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 第二外国語講座（タイ語、韓国語）について、学校設定科目としてそれぞれ1単位で開講する。</p>
<p>⑧ -3 上 記 以 外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価</p> <p>① 高大連携を踏まえて、本学の留学生（学生、現職教員）を中心に、生徒と討論、ワークショップなどを放課後を中心に開催する。</p> <p>② 本校では、統計学の学習を、情報科と数学科とがコラボレーションした形で行い、そこで得た手法を用いて、他の教科や総合的な学習の時間で行う研究に応用・発展させるなど、教科を超えた学習のコラボレーションの体制が整っている。SGHの新たな取り組みについても、関連する教科のコラボレーションによって実施できるであろう。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 特になし。</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の実施内容・実施方法 タイ王国からの留学生の受入れ、帰国生の受入れ、海外、特に東南アジアからの学校訪問の受入れを積極的に行ってきたので、今後も引き続き行うとともに、本学の留学生を中心に、討論、ワークショップなどを行う。</p> <p>(4) 幹事校としての取組（該当する場合のみ記入）</p>
<p>⑨ その 他 特 記 事 項</p>	<p>SULE委員会において、既存のSSH事業と、新規のSGH事業とを明確に区分し、両者が車の両輪となるように、企画・運営を行う。</p>

資料(3)

【別紙様式 6】

--

ふりがな	とうきょうがくげいだいがくふぞくこうとうがっこう	指定期間	26~30
学校名	東京学芸大学附属高等学校		

平成 26 年度スーパーグローバルハイスクール構想調書

1 研究開発構想名

アジアとの共通理解・協力関係を構築するキー・コンピテンシーの探究と実践

2 研究開発の目的・目標

(1) 目的

世間ではグローバル・リーダーと言うと、英語などの外国語を操り、自分自身の所属する社会のみの利益を誘導する立場にあつて、諸事を牽引していく役割を担う人を思い浮かべがちである。

本校では、バランスよく世界を眺められることがグローバル・リーダーの最も大切な資質と位置付けている。そのためには、生徒がさまざまな社会課題に対して関心を持つことがまず必要であるが、そのためには特定の分野に偏らない学習が必要不可欠である。おそらく、基礎・基本の学習なしに、語学力を身に付けても、リーダーとしての資質は備わらないと考える。

基礎・基本の学習を基に、卒業後の進路を考えていくことで、生徒は他国、他民族との協業、問題解決を意識した主体的活動を構築できるようになりえるであろう。そういった他国、他民族との協業、問題解決を意識した主体的活動を構築できる生徒を育成することが本研究の目的である。

(2) 目標

上記に掲げた目的に対して、以下のことを達成目標とする。

- ① 自らの立場をとらえた上で、他者の視点を学ぶことを通して、相互不理解を外から眺め、論理的に物事を考えることができるようになる。
- ② 母語が異なる人同士で、英語を介して自分自身の考えを主張できるようになる。さらに、英語で相手の立場を理解しながら、英語で自分自身の考えを主張できるようにする。
- ③ 問題解決を意識して、主体的に活動できるようになる。
- ④ 自ら課題を見つけることができるようになる。

3 研究開発の概要

本校では、バランスよく世界を眺められることがグローバル・リーダーの最も大切な資質と位置付けた。その資質を生徒が獲得するために、以下のような教科の枠組みを超えた課題研究等の研究開発を行う。

- ① 合意形成能力育成カリキュラム作成
- ② プレゼンテーション能力開発、レポート・論文作成能力開発カリキュラム作成
- ③ キー・コンピテンシー研究会の開催
- ④ 模擬国連の実施
- ⑤ 第二外国語講座（タイ語、韓国語）の設置
- ⑥ 国際社会で活躍するOB・OGのキャリアガイダンス

さらに、ネット通信も含めて、主として、タイ王国、韓国の高校生・大学生と共同研究等を行う機会を通して、現代の課題を発見・理解し、その課題解決を意欲的に主導できる生徒を育成する。

4 学校全体の規模

普通科 在籍者 1039 名

5 研究開発の内容等

(1) 全体について

① 現状の分析と課題

進路選択や学習成果の応用、課題設定などに地球規模の主体的課題としての意識が連動しないのが現状である。多くの地域との協力関係や問題の合意形成のプロセスの学習から、自らの学びの延長上に主体的にグローバルな課題への取り組みを目指す意識が高まると考える。

また、グローバルな社会・ビジネスに関する課題を解決していくためには、深い教養を身に付け、論理的にかつ、批判的にものごとを考え、行動していかなければならない。その際に、単に、日常会話が外国語でできるだけでは不十分で、いわば、内容の伴ったコミュニケーションになっていなければならない。真のグローバル・リーダーには、自国の伝統文化を尊重する態度も必要である。自国の伝統文化を尊重する態度なしに、他の地域や国々の理解はできないはずである。そのためには、いかに従来からの教育内容を効率よく学習できるかも鍵となる。その際、文科系、理科系といった狭い分類にとどまらず、文理融合型での学習が不可欠である。既存の教育内容の再構築を行い、限られた時間内で新たな取り組みと合わせて、いかに実践していくかを目指したい。

② 研究開発の仮説

上記に示した現状を踏まえ、以下のような仮説を設定した。

(仮説1) 合意形成を図る学習

多くの生徒が地球規模の主体的課題と無関係に、進路選択や学習成果の応用、課題設定を行っているのは、合意形成を図る学習が欠如しているからであると考えられる。生徒が身近な学校生活のことを話し合っているにもかかわらず、なかなか他者の考えていることを顕在化することができず、お互いの意見を一致させることができないでいる。この現状がある限り、地球規模の主体的課題について、取り組もうという意志は働かないであろう。既存の教科・科目で取り上げることの難しい合意形成を図る学習を行うことが、グローバルな課題への取り組みを目指す意識を高める一歩だと考える。

(仮説2) 論理的かつ、批判的にものごとを考え、行動する

批判的思考とは、一般的に、証拠、正確さ、論理、合理性、公平性にもとづいて概念化したり分析したり総合判断することを指していて、議論の基礎とされる。議論の中において、間違った推論、誤謬、虚偽、詭弁などを見分けることも含まれている。このような思考について、教育認知心理学の立場で推奨する動きもある。グローバルな社会・ビジネスに関する課題を解決していくには、身に付けなければならない姿勢だと考える。

(仮説3) 文理融合型での学習

例えば、環境問題を考える際に、政治・経済的な問題であっても、科学・技術の問題とも絡み合っているのが現状である。もし、リーダーが偏った学習に基づいて、さまざまな判断したならば、適切な判断を下すことは困難であると考えられる。やはり、バランスよく世界を眺めるためには、幅広く、文科系、理科系といった狭い分類にとどまらず、文理融合型での学習が不可欠であると考えられる。

(2) 課題研究について

① 課題研究内容

21世紀型能力の育成カリキュラムの構築と学校教科への導入・評価を行う。

まず、日本語でグループワーク、ディスカッション、論文作成、プレゼンテーションなどの学習を行い、それらを有機的に結び付け、さらに高い水準に上げるとともに、最終的に英語で発信できるようにしていく。その課題研究の内容としては、以下の通りである。

- ① 国際的な環境問題に対して、いかに合意形成を図っていくかを考える講座を開発・実施する。具体的な課題を設定し、年間を通じて英語で講義をし、評価する。
- ② 韓国、タイなどとの海外交流を通じた生徒間の共同研究の実施と、ネットを利用した交流と準備、教科をこえたプレゼンテーション能力育成カリキュラムの開発・実施、教科をこえたレポート・論文作成能力育成カリキュラムの開発・実施を行う。

- ③ 3年間の段階に応じたプレゼンテーション能力開発やレポート・論文作成カリキュラムを作成し、多教科で目的を共有して実施、評価を行う。
- ④ 教員の取り組みとしては、隔週で月曜日の放課後に、教員がキー・コンピテンシーを考える会を行い、本研究で必要なキー・コンピテンシーを明らかにする。
- ⑤ 日本とタイを中心に、模擬国連を行う。
- ⑥ 第二外国語講座（タイ語、韓国語）の設置
- ⑦ 国際的に活躍している卒業生やタイ王国で活躍しているタイ人の卒業生によるキャリアガイダンスを実施することで、グローバルな社会・ビジネスに関する課題を肌で感じる機会を得る。
- ⑧ 短期留学の推進

② 課題研究の実施方法・検証評価

タイ王国、韓国などとの海外交流を通じた生徒間の共同研究の実施とネットを利用した交流と準備、教科をこえたプレゼンテーション能力育成カリキュラムの開発・実施、教科をこえたレポート・論文作成能力育成カリキュラムの開発・実施。3年間の段階に応じたプレゼンテーション能力開発やレポート・論文作成カリキュラムを作成し、多教科で目的を共有して実施、評価をおこなう。

東京学芸大学等の語学講座の協力を得て、第二外国語講座（タイ語、韓国語）を実施し、その学習の成果は、研修、学習旅行で確認する。

<各研究開発単位について>

- ・合意形成能力育成カリキュラム作成
 - a 研究開発単位の目的、仮説との関係、期待される成果
本研究の柱の1つであり、グローバルな課題への取り組みを目指す意識を高めるための最初の取り組みである。合意形成能力育成カリキュラムが作成され、実践できれば、学校生活における話しいが適切に行うことができるようになると思う。
 - b 内容
国際的な環境問題から始めるが、より適切な内容があれば変更もありうる。
 - c 実施方法
最初は既存の教科・科目の時間の中で開発・実施する。具体的な課題を設定し、学外の講師と協力して、英語で講義を行う。
 - d 検証評価方法
生徒への事前・事後アンケートとともに、LHRなどの場面を中心とした話し合いの様子の変容の様子を記録し、評価する。
- ・プレゼンテーション能力開発、レポート・論文作成能力開発カリキュラム作成
 - a 研究開発単位の目的、仮説との関係、期待される成果
3年間の段階に応じたプレゼンテーション能力開発やレポート・論文作成カリキュラムを作成し、多教科で目的を共有して実施することで、今まで以上に情報発信力が育成されることが考えられる。
 - b 内容
今までのプレゼンテーションやレポート・論文の状況を見直し、より質の高いものになるよう指導する。
 - c 実施方法
既存の教科・科目の時間の中で、新しく開発したプログラムにのっとり実施する。
 - d 検証評価方法
生徒への事前・事後アンケートとともに、これまでのプレゼンテーションやレポート・論文の成果と比較しながら評価を行う。

- ・キー・コンピテンシー研究会の開催
 - a **研究開発単位の目的、仮説との関係、期待される成果**
本校が目指すグローバル・リーダー像を明確にし、どのようにすれば、アジアとの共通理解・協力関係を構築することができるかを明らかにできる。
 - b **内容**
本校で取り組むSGHの精神的支柱となりうる。
 - c **実施方法**
教員の取り組みとしては、隔週で月曜日の放課後に、教員がキー・コンピテンシーを考える会を開催していく。必要に応じて、国立教育政策研究所等の協力を仰ぐ。
 - d **検証評価方法**
開発する課題研究が適切なものかどうかの検証に役立つ。

- ・模擬国連の実施
 - a **研究開発単位の目的、仮説との関係、期待される成果**
実際の国連での会議と同じように議論、交渉し、決議を採択することから、自然と合意形成や論理的かつ、批判的にものごとを考えることにつながると考える。いわば、合意形成能力育成やプレゼンテーション能力育成の実践の場と言えよう。
 - b **内容**
何をテーマにするかは、模擬国連の専門家の意見を参考にしながら、準備段階の訪問で決定する。
 - c **実施方法**
タイ王国および、韓国の生徒を招き、実施する。
 - d **検証評価方法**
模擬国連の専門家に協力を仰ぎながら、検証評価方法を模索していく。

- ・第二外国語講座（タイ語、韓国語）の設置
 - a **研究開発単位の目的、仮説との関係、期待される成果**
主に交流を行うタイ王国、韓国の王国、韓国高校生・大学生と共同研究等を円滑に行うことを目的に、相手国の言葉や文化を知る手がかりの1つとするために設置する。相手との合意形成を達成する実践の場の1つになりうると考える。
 - b **内容**
挨拶など、簡単な日常会話を中心に扱うものとする。現時点では中学校1年生の英語レベルの初級の内容を考えているが、生徒の状況によっては、中級、上級のレベルの内容も考えることとする。
 - c **実施方法**
タイ語、および韓国語を指導できる非常勤講師の指導による。
 - d **検証評価方法**
通常のテストによる評価の他、学習の成果は、研修、学習旅行等、実地の場で確認する。

- ・国際社会で活躍するOB・OGのキャリアガイダンス
 - a **研究開発単位の目的、仮説との関係、期待される成果**
国際的に活躍している卒業生やタイ王国で活躍しているタイ人の卒業生によるキャリアガイダンスを実施することで、グローバルな社会・ビジネスに関する課題を肌で感じる機会を得るのが目的である。このキャリアガイダンスを通して、グローバル・リーダーのイメージもつかめるであろう。
 - b **内容**
 - c **実施方法**
キャリアガイダンスはできる限り、対面で行うが、日本にいないOB・OGに対しては、ネットを利用して行う。
 - d **検証評価方法**

事後のアンケートなどで評価するが、現状との卒業生の進路の変化で検証することになるであろう。

③ 課題研究に関して必要となる教育課程の特例

a 必要となる教育課程の特例とその適用範囲

特になし。

b 教育課程の特例に該当しない教育課程の変更

第二外国語講座（タイ語、韓国語）について、学校設定科目としてそれぞれ1単位で開講する。これは、主に交流を行うタイ王国、韓国の王国、韓国高校生・大学生と共同研究等を円滑に行うことを目的に、相手国の言葉や文化を知る手がかりの1つとするために設置する。

教科：外国語

科目：タイ語および、韓国語

目標：(1) 初歩的なタイ語および、韓国語を聞いて話し手の意向などを理解できるようにする。

(2) 初歩的なタイ語および、韓国語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。

(3) タイ語および、韓国語を読むことに慣れ親しみ、初歩的なタイ語および、韓国語を読んで書き手の意向などを理解できるようにする。

(4) タイ語および、韓国語で書くことに慣れ親しみ、初歩的なタイ語及び、韓国語を用いて自分の考えなどを書くことができるようにする。

内容：挨拶など、簡単な日常会話を中心に扱うものとする。現時点では中学校1年生の英語レベルの初級の内容を考えているが、生徒の状況によっては、中級、上級のレベルの内容も考えることとする。

履修学年：1～3年

単位数：1単位

指導方法：タイ語、および韓国語を指導できる非常勤講師の指導による。

年間指導計画：無理なく、簡単な日常会話ができるように、指導計画を立案する。

学習指導要領に示す既存の教科・科目とは、外国語と関連しているが、内容的には中学校の英語との関連が深い。

(3) 課題研究以外の取組

① 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価

<各研究開発単位について>

- ・本学の留学生（学生、現職教員）を中心に、生徒と討論、ワークショップなどを放課後を中心に開催

a 研究開発単位の目的、仮説との関係、期待される成果

さまざまな背景を持った本学の留学生と生徒とが討論、ワークショップなどを行うと、母語が異なるため、必然的に英語を介して自分自身の考えを主張せざるをえなくなる。また、相手の考えていることを顕在化しなければ、お互いの意見を一致させることができず、合意形成ができない。英語での討論、ワークショップを定期的に行うことで、授業時間以外での実践を行うことが可能となる。

b 内容

最初は、日本と留学生の母国との違いなど、比較的扱いやすいテーマから入り、徐々にグローバルな内容にしていく。

c 実施方法

定期的な、放課後の時間帯に、留学生と生徒とが討論、ワークショップなどを行う。

d 検証評価方法

事前および、事後アンケートを通して、生徒の変容を明らかにする。

- ・教科を超えた学習のコラボレーション

a 研究開発単位の目的、仮説との関係、期待される成果

教科を超えた学習のコラボレーションを行うことで、文理融合型の学習が進めやすくなる。その結果、ある教科・科目だけで取り上げるよりも、学習の深まりが期待できる。

b 内容

統計学の学習を、情報科と数学科とがコラボレーションした形で行い、そこで得た手法を用いて、他の教科や総合的な学習の時間で行う研究に応用・発展させるなど、教科を超えた学習のコラボレーションの体制が整いつつあるので、さらに適切な内容がないか模索していく。

c 実施方法

それぞれの教科・科目の授業の中で、状況に応じて、TT体制を組んで実施する。

d 検証評価方法

授業開発を行う際に、評価の観点を明確にし、観点別評価を行う。

② 課題研究以外の取組で必要となる教育課程の特例等

a 必要となる教育課程の特例とその適用範囲

特になし。

b 教育課程の特例に該当しない教育課程の変更

特になし。

③ グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法

タイ王国からの留学生の受入れ、帰国生の受入れについては、すでに今までも行っているため、今後も継続して行っていく。また、本校の帰国生入試の条件（滞在先の国または知己にある学校に、日本の中学校の学齢期に相当する3年間のうち2年間以上在学し、教育を受けた者であること、日本に帰国した場合は、帰国後、本校への入学までの期間が1年未満であること等）があるため、実際には海外で学んでいても、帰国生入試ではなく、一般中学生、または、附属中学校生の条件で入学している生徒は多くいるので、海外の学校での学習経験を持つ生徒は意外と多いのが現状である。

さらに、海外、特に東南アジアからの学校訪問の受入れを積極的に行ってきたので、今後も引き続き行くとともに、高大連携を踏まえて、本学の留学生（学生、現職教員）を中心に、生徒と討論、ワークショップなどを行うことを考えている。

6 研究開発計画・評価計画

1 年次（研究開発の基盤作りと問題点の明確化）

1年次は次年度以降の基盤作りとして、以下のことに取り組む。

① 合意形成能力育成カリキュラム作成

国際的な環境問題に対して、いかに合意形成を図っていくかを考える講座を、既存の教科・科目の時間の中で開発・実施する。具体的な課題を設定し、学外の講師と協力して、英語で講義をし、評価する。

② タイ王国、韓国の高校生・大学生と共同研究

今まで、交流のあるそれぞれの国の高校と共同研究を行うことの覚書を交わし、提携プログラムを開発し、何をテーマにするかなどを話し合う準備段階の訪問を行う。本格的な共同研究は2年次以降にと考えている。なお、高校生同士の共同研究に、サポートとして現地の大学生に協力してもらうための準備も行う。必要に応じて、ネット通信を利用した交流を行っていく。

③ プレゼンテーション能力開発、レポート・論文作成能力開発カリキュラム作成

理数分野で作成した授業と教材を基に、人文科学、社会科学の分野等で活用できるプレゼンテーション能力育成のための授業と教材を開発、試用する。グローバル・リーダーとして、説得力のある表現力を育成するための教材とはどのようなものか、生徒への活用を通して評価・検証を目指す。

あわせて、本校ですでに実施しているレポート・論文の課題を再構築し、今まで以上に説得力のあるレポート・論文を書けるようにするための教材とはどのようなものか、教科横断的に考えていく。

④ キー・コンピテンシー研究会の開催

隔週で月曜日の放課後に、教員がキー・コンピテンシーを考える研究会を行い、アジアとの共通理解・協力関係を構築するために必要なキー・コンピテンシーが何か、調査・学習する。

⑤ 模擬国連の実施

模擬国連をタイ王国および、韓国の生徒を招き、実施する。それぞれの国の代表となる大使が、グローバルな議題について自国の政策や歴史、外交関係などと照らし合わせながら、実際の国連での会議と同じように議論、交渉し、決議を採択することを目的とする。開催にあたっては、模擬国連の専門家に協力をしてもらい、2年次に本格的に実施できるように準備する。

⑥ 第二外国語講座（タイ語、韓国語）の設置

主に交流を行うタイ王国、韓国の王国、韓国高校生・大学生と共同研究等を円滑に行うことを目的に、相手国の言葉や文化を知る手がかりの1つとするために設置する。

⑦ 国際社会で活躍するOB・OGのキャリアガイダンス

本校では、今までもキャリアガイダンスの一環として、進路講演会を行ってきたが、どうしても国内にいる卒業生に限られてきた。そこで、国際的に活躍している卒業生やタイ王国で活躍しているタイ人の卒業生によるキャリアガイダンスを実施することで、グローバルな社会・ビジネスに関する課題を肌で感じる機会を得るようにする。

2年次（研究開発の視点の明確化と実践の積み重ね）

2年次は1年次の様々な課題を基に、深化・充実させる。

① 合意形成能力育成カリキュラム作成

2年次は国際的な環境問題に対して、いかに合意形成を図っていくかを考える講座を、学外の講師と協力して、年間を通じて英語で講義をし、評価する。

② タイ王国、韓国の高校生・大学生と共同研究

1年次に覚書を交わした高校と、本格的な共同研究を行う。その際、サポートとして現地の大学生に協力してもらおう。研修で訪問しない時期も、ネット通信を利用した交流を行っていく。

③ プレゼンテーション能力開発、レポート・論文作成能力開発カリキュラム作成

1年次に開発した人文科学、社会科学の分野等で活用できるプレゼンテーション能力育成のための授業と教材を、1年間かけて実施してみて、評価・検証を行う。

あわせて、1年次に考えた、今まで以上に説得力のあるレポート・論文を書けるようにするための教材に基づき、実践を行い、評価・検証を行う。

④ キー・コンピテンシー研究会の開催

継続して、隔週で月曜日の放課後に、教員がキー・コンピテンシーを考える研究会を行い、アジアとの共通理解・協力関係を構築するために必要なキー・コンピテンシーが何か、調査・学習する。

⑤ 模擬国連の実施

模擬国連をタイ王国および、韓国の生徒を招き、本格的に実施する。

⑥ 第二外国語講座（タイ語、韓国語）の設置

1年次に設置した第二外国語講座を継続しつつ、さらなる発展講座を検討する。

⑦ 国際社会で活躍するOB・OGのキャリアガイダンス

継続して、国際的に活躍している卒業生やタイ王国で活躍しているタイ人の卒業生によるキャリアガイダンスを実施する。

3年次（研究の継続と中間報告会）

3年次の研究計画と評価計画は、原則的に1、2年次までの活動は継続し、実践経験を積んだ「合意形成能力育成カリキュラム」、「プレゼンテーション能力開発、レポート・論文作成能力開発カリキュラム」を国内外の学校に提示していく活動と、アジアとの共通理解・協力関係を構築するキー・コンピテンシーとは何かについて、国立教育政策研究所等の協力を得ながら、明らかにしていくとともに、さらにこれらを獲得させる授業法および学校教育システムの研究開発を進める。

4 年次(研究課題の重点化)

3年次までの研究計画と評価計画を継続しながら、3年間で明らかになった課題について、重点的に取り組んでいく。

5 年次(研究成果のまとめ)

今までの研究計画と評価計画を継続しながら、4年次までの研究・実践の成果をまとめ、国内外の学校に提示していく活動に取り組んでいく。

7 研究開発成果の普及に関する取組

常に、本学や外部機関による評価を受け、本校のホームページを通じた活動報告を日常的に行っていく。本校で毎年1回開催する公開研究大会で授業実践を公開し、研究協議会を開催することで、本校でのSGH事業の成果の普及を図る。

また、本校紀要へ研究成果を掲載するとともに、成果報告書を作成する。

8 幹事校としての取組（該当する場合のみ）

該当なし。

9 研究開発組織の概要（経理等の事務処理体制も含む）

本校では、以下のようなSULE委員会が、SGHの研究推進を行っていく。

① 構成

校長、副校長、事務係長、教科担当SGH委員から構成する。

② 役割

- ・ SGH研究計画全般の理念に基づく、SGH 研究の推進
- ・ 運営指導委員会、文部科学省、東京学芸大学等の管理指導団体との連絡
- ・ 連携各大学、研究機関、企業、他のSGH指定校等、SGH活動における対外連絡と交渉
- ・ 学校内各教科・科目、分掌、各学年等との連絡と調整
- ・ 研究開発と継続に必要な予算案の作成と管理

③ 部会

本SGHの中核となる事業に対し、7部会を設ける。

- ・ 合意形成能力育成カリキュラム作成部会
- ・ SGH国際担当部会
- ・ プレゼンテーション能力開発部会
- ・ キー・コンピテンシー基盤研究部会
- ・ 模擬国連担当部会
- ・ 第二外国語講座担当部会
- ・ キャリアガイダンス部会

④ 係分担

7部会以外に、部会に準じた担当を設ける。

- ・ SGHコンテスト担当…SGH関連のコンテストの告知、生徒の参加推進
- ・ 海外留学・海外研修担当…既存の帰国生・留学生委員会、および、進路指導部の担当者が兼任
- ・ 情報担当…情報機器の活用、HPでの情報発信、先進校との情報交換
- ・ 経理担当…SGH予算の執行と管理、物品購入と保全、旅費等の把握、会計監査
(本校事務、および、SGH事務と連携する)

⑤ 定例委員会

毎月1回、SULE委員会として定例会を開催し、必要に応じて、各部会、担当会を行う。